連携と子どもの学習意欲

── フィラデルフィア日本語補習校の取り組みを通して ──

前フィラデルフィア日本語補習授業校　校長
福岡県宗像市立自由ヶ丘中学校　教頭　高　山　芳　文

キーワード：保護者，関係機関，フィラデルフィア，学習意欲，作文

はじめに

初めての在外教育施設勤務でフィラデルフィア日本語補習授業校に派遣の機会をいただいた。積極的な学校経営を展開する理事会に参加し，各方面と連携しながら国外で生活している日本人子女たちの学習意欲を維持向上させる取り組みに参加できたことは，たいへん貴重な体験となった。

１．フィラデルフィア日本語補習授業校の概要

フィラデルフィア日本語補習授業校（Japanese Language School of Philadelphia＝以下JLSPと表記）はペンシルバニア州認可の教育NPO法人であり，1972年に開校して本年39年目を迎えている。

所在地は，アメリカ合衆国発祥の地ペンシルバニア州フィラデルフィア市近郊Wynnewoodにあり，ニューヨーク市から約100マイル，ワシントンDCから約120マイルとアメリカ東海岸メガロポリスの中にある。学校周辺にはフィラデルフィア美術館，バーンズ美術館などもあり，居住環境としてたいへん良いところに立地している。

JLSPは借用校として，フレンズセントラルスクール（デイビッド・フェルセン総長，以下FCSと表記）を利用している。

FCSの歴史は古く1845年に創立されて165年以上の年月がたっている。また，姉妹校であるフレンド校はアメリカ合衆国や日本にもあり，アメリカ建国に大きな貢献をしたキリスト教クエーカー教徒（フレンズ）の理念に基づいて設立されている。日本との関係も深く，明治時代の新渡戸稲造，津田梅子らがお世話になった旧モリス邸がFCSの校舎としてそのまま活用されている。

JLSPは近年の在籍者数が約300名で推移し，教職員数は32名，幼稚部・小学部・中学部・高等部・日本語コース・成人日本語教室の６コースがある。授業は年間40日間で毎週土曜日４時間の授業を実施している。

JLSPには，理事会を中心に教育専門部（教師会）並びに保護者の組織として父母会，業務委員会（総務・経理・教務・行事・広報・図書の各部）が設置され，保護者は全員が父母会と業務委員会に所属している。また，教員として優秀な人材が広く一般から募集され，各教室では熱心に子どもたちの指導がなされている。幼稚部と小学部については，担任と副担任の２名体制で学級経営と授業を担当している。中学部や高等部では国語以外の数学・社会（地理・歴史・公民・世界史）を選択制として履修するようにしている。

２．校内組織との連携

(1) 理事会「子どもたちの学習環境を整える」

理事会は，理事長をはじめファンドレイジング・人事・渉外・経理・父母会長・業務委員長・校長で構成されている。年間６回の定例会を持ち教育活動や財務の計画及び報告交流を主議題として審議している。理事会もほとんど保護者で構成されているが，冷静で客観的な対応がなされていると考えている。具体的には，教員について優秀な人材を確保するために校長が推薦する人物に対して人事面談を実施し，応募者から代講や副担任を経験してもらいながら採用を決定している。理事会としての組織運営とネットワークによる人材確保のおかげでゆとりを持った

優秀な人材配置が可能となっている。また，借用校との良好な関係構築が図られており，理事会の積極的な学校経営が「子どもたちの学習環境を整備する」に十分な活動となっている。

(2) 父母会と業務委員会「子どもの社会化の促進と学習意欲の基盤の強化」

保護者は双方に必ず参加しているため，保護者でつくる補習授業校であることを強く意識することになる。父母会は，保護者の意識を高める学習会などを実施し，業務委員会は図書室（蔵書約6000冊）の運営や学費徴収などの業務や入学式・運動会・学芸会・卒業式等学校行事の運営業務のすべてを担当している。保護者の活動によって相互交流も盛んとなり，「子どもの社会化が促進」されて「学習意欲の基盤を支えている」ともいうことができる。

(3) 事務局とボランティア「具体的な学習基盤の整備と安心の環境」

授業等の連絡や準備などはE-mailを通して行われる。理事会・子ども・教員・保護者・借用校等の情報伝達の中心に位置するのが事務局である。ここには派遣教員・総務及び経理担当事務員各１名，合計３名が在籍し，借用校の近くのビルで日常の事務処理等を行っている。２名の事務局員はたいへん優秀で派遣教員の交代でもぶれがなく一貫した業務態度は「子どもたちの具体的な学習基盤」を支えているところである。また，現地の心理士免許を所持して大学の先生である方がボランティアとして相談活動にあたっている。子どもたちのみならず保護者の心理的マネジメントはJLSPに参加する人々に「安心の環境」を創造しているといえる。

３．校外組織との連携と行事

(1) 日本の公的機関と在外公館

子どもたちの学習活動について，場と人の確保は最重要課題である。校舎借料や教員賃金などについての財務的支援は不可欠であり，在外公館を通して具体的な対応がなされている。特に在外公館については，最も現状を知るところとして補習授業校運営に対して大きな理解をいただいたことは特筆したい。補習授業校校長会議でUCLA教授（日本人）が「補習授業校は日本が世界に誇ることができる遠隔教育システムである。」という講話を聴いて同感したことがある。

教科書の取扱いや教育課程編成作業，教材備品整備については海外子女教育振興財団，全国海外子女教育研究会が大きな力となった。

(2) 関係機関との連携による「ホンモノ体験学習」

① 西宮伸一氏（前，在NY日本国大使館大使）の学校訪問

２年２回にわたる学校訪問をいただいた。生徒会を中心に大使との懇談の時間も設けていただいたことで子どもたちも張り切って授業に参加していたのが印象的だった。

② J-7との連携事業

J-7は，フィラデルフィアにある日本人会・日米協会・日系人会・JLSP・松風荘（日本建築と庭園）・和太鼓サークル・生け花の会の日本人関係7団体が参加して行事等を交流している。このことでフィラデルフィアに居住する約2000名の日本人の行事への参加と交流に役立てている。松風荘はNY万博時代に建設されたもので移築されて千住博画伯の障壁画などを持ち，JLSPの子どもたちは桜祭り，夏の凧揚げ大会，お茶の会，七五三などの行事への参加をはじめとして，JLSPのための無料見学会を毎年９月に設定してもらい日本文化の学習会を開催してもらっている。

③ 行事と子どもたちのホンモノ体験学習

切り絵教室，数独，朗読会等の行事を持つことで子どもたちの日本文化への興味関心を育てるとともにJLSPでの継続的な学習意欲を育てるのに有用であったと考えている。特に西宮大使ご夫人にお世話をいただいた白坂道子氏

の朗読会は小学部２年生の子たちから「おもしろ～い」の声が出るほど一体感がある学習会となった。

JLSPに限らず，在外教育施設では日本では出会うこともないだろう著名人による学習会を企画することができる。「ホンモノ体験」が子どもたちの心を育むことになると考えている。

(3) 借用校FCSとの関係改善と交流会

歴史的に日本との関係が深いFCSの校舎は，子どもたちの学習意欲を維持継続させるのに十分な施設である。JLSPはどこの補習授業校にもありがちな転々とした借用校舎を経験している。派遣教員を受け入れるときに初代理事長として就任していた島田高司氏（継続して現在もJLSP顧問），彼自身も東京教育大学大学院修士を修了し，テンプル大学大学院博士課程で教育博士号を授与されている人物で教育への思いは大きなものがある。また，会社を興して成功するなどアメリカンドリームを実現した人物としても現地では高く評価されている。彼はFCSデイビッド・フェルセン総長との関係を結び現在まで良好な関係が継続できている重要な人物である。島田氏はかつてFCS理事会へ理事としてFCSの学校経営にも参加し，また，FCSへ巨大な体育館を寄贈している。

2010（平成23）年度，関係20周年を記念して市内有名ホテルでFCS夕食会を開催した。FCSフェルセン総長をはじめ理事会や教職員，NY総領事館大使西宮伸一氏やペンシルバニア州政府，フィラデルフィア市長，JLSP理事会，教職員等で記念式典を実施した。島田氏とフェルセン氏の20年間の友情に感謝し，これからの両校の発展を祈念する大きな出来事となった。

４．作文指導と自尊感情の育成

作文指導については，各学級担任の大きな尽力が基盤となった。文部科学省クラリネットで紹介されている補習授業校へのワンポイントアドバイス等を参考にしながら作文指導の学習を進めた。子どもたちの国語力，表現力の育成を目標として校外で募集されているものに子どもたちの作文は積極的に応募された。一番身近なものは，現地日本語新聞「週刊NY生活」であった。生活作文ではあるが，掲載された作品は子どもたちや保護者，はては日本にいる子どもの祖父母などには大好評であった。子どもたちには自尊感情を高めるとともに学習意欲につながっていった。

また，「週刊NY生活」には，ほとんど毎週といっていいほど校長で起稿した記事原稿を送付して学校行事等を掲載してもらった。これは，保護者もJLSPへの所属感をより高める結果となったと思っている。「ホンモノ体験学習」や「４大学校行事」については毎回掲載してもらうことができた。「週刊NY生活」の発行人兼CEOの三浦良一氏は，「フィラデルフィアに補習校があることは知っていましたが，記事のおかげで身近に感じるようになりました。」とJLSPの活動を紹介することが有効に働いたと思われた。

５．成果と課題

成果については，次の三つのことが言える。

一つは，保護者の活動で子どもたちの学習意欲が継続的に支えることができた。

二つは，対外的連携が子どもの活動意欲を促進し，ホンモノ体験で子どもの学習意欲を誘引することができた。

三つには，活動の意欲を第三者に評価してもらうことで子どもたちの自尊感情の育成や客観的な子ども自身の姿を確認することができた。

課題として，作文指導について詳細なマニュアルを作成して発達段階に応じた指導をする必要があると考えた。また，応募先に海外子女振興教育財団など日本への応募を広げることで子どもの国語学習に資することが考えられる。

おわりに

派遣教員が３年程度で交代する現実がある。場合によっては大きな混乱を招くこともあると聞く。JLSPにおいても決して例外ではないだろう。しかし，学校目標の一つである「子どもたちを中心とした教育活動」を理事会・保護者・関係機関が共通して理解し実践することで「大きくぶれない」学校経営が継続されるであろうと確信している。

３年間の在任期間，日本人であるという小さな共通項でくくられた関係でJLSPにも参加したがそれ以上の大きな関係で子どもたちや保護者，関係者と連携することができて意欲的に生活ができたと考えている。関係の方々，特にJLSPの子どもたちに深く感謝したい。